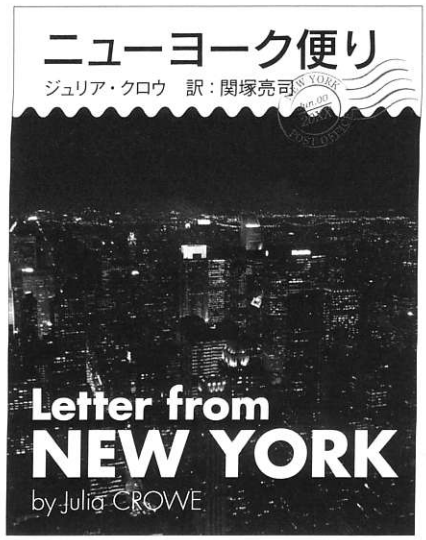


## ●ダダリオ基金コンサート・シリーズ

カーネギー・ワイル・ホールで開かれる恒例のダダリオ基金コンサート・シリーズで、今回取り上げられたのは、フランスのギタリスト、ラザール・シェルアーナのデビュー・コンサートと、ポーランドのギタリスト、マルシン・ディラのコンサートだった。

ダダリオ社は、各種撥弦楽器の弦、ドラムヘッド、ドラムスティック、ドラム練習用パッド、ギター及び管楽器のアクセサリーの設計、製造、マーケティングを行なっており、製品は世界120ヵ国で販売されている。

ダダリオ・ファミリーは、今回のようなコンサート・シリーズを企画することによって芸術家を支援し、芸術の振興に寄与している。このコンサート・シリーズの目的は、次世代を担う新進気鋭の若手ギタリストや芸術家に、世界で最も伝統的なコンサートホールであるニューヨーク・カーネギー・ワイル・ホールでの公演のチャンスを与えることにある。

コンサートの芸術監督、マイケル・ニューマンとローラ・オルトマンは、今回のコンサートの狙いは、キャリアの初期段階にある若手芸術家を世界に紹介することにあると記している。彼らも、演奏活動をスタートさせた時点で、ダダリオがスポンサーとなって世界的に著名なギタリストたちとコンサートを開く幸運に恵まれた。

その伝統は、現在も継続しており、世界的な規模で、若手ギタリスト達を質量ともに大きく成長させている。

ラザール・シェルアーナ

## ●フランスのギタリスト、ラザール・シェルアーナのデビュー・コンサート

4月11日のコンサートの前半は、25歳のアルジェリア系フランス人ギタリスト、ラザール・シェルアーナが演奏した。

フランス南部ビエンヌ出身の彼は、6歳でギターを始め、オーストリアのウィーン市立音楽学校のラファエル・ヴァッカロ教授の指導を受けた。その後フランスのリヨンにある国立音楽大学でヘスス・カストロ＝バルビ教授に師事した。

彼は国際ギターコンクールにおいて数多く優勝しており、特に2012年のミケーレ・ピッタルーガ・ギターコンクール（イタリア・アレッサンドリア国際ギターコンクール）で優勝した際には、副賞としてダダリオ・コンサートシリーズを獲得した。今回のデビュー・コンサートは、そのダダリオ賞として実施されたものである。

シェルアーナは、オープニングとして、ジャン＝フィリップ・ラモーの〈鳥のさえずり〉と〈王太子妃〉を自身の編曲で演奏したが、美しい花のようなフレージングに満ちていた。

18世紀に活躍したフランスの作曲家兼音楽理論家であるラモーは、クラヴサン用作品の作曲でも知られている。彼は、1723年にパリに移り、ルイ15世に仕える宮廷作曲家になった。

シェルアーナが取り上げた〈鳥のさえずり〉は、ラモーの小品集《クラヴサン曲集 第2巻》からの抜粋である。この作品は鳥の鳴き声の2音をモチーフにしており、装飾音と16分音符の動きで鳥がさえずる様子を描いている。

〈王太子妃（ル・ドーファン）〉という曲は、ラモーがオペラの作曲に転じた後に書かれた唯一のクラヴサンのための作品である。曲のタイトルは、1747年3月にフランスの王位継承者であるルイ・ドーファン（ルイ15世の嫡子、王太子）

マルシン・ディラ

と結婚したドレスデンのプリンセス・マリー＝ジョゼフ・ド・サクスをイメージして作られている。速いアルペジョとスケールで構成された作品である。

続いて、シェルアーナはジュリオ・レゴンディの〈夢 Op.19〉を演奏した。ジェノヴァ生まれでフランス育ちのレゴンディを父親は天才児として育成した。彼は初め7弦ギターを弾き、その後8弦ギターを弾いた。

シェルアーナは次に、アントニオ・ヒメネス・マンホン作曲の〈バスクの調べ Op.19〉を演奏した。視覚障害があったアンダルシアのギタリスト兼作曲家マンホン（1866-1919）は、フランシスコ・タレガやイサーク・アルベニスの友人であり、ミゲル・リョベートやアグスティン・バリオス・マンゴレにインスピレーションを与えた人物と言われている。

〈バスクの調べ Op.19〉は、バスク地方に伝わる5/4拍子の舞曲ソルツィーコの主題をベースにした民族色の強い作品である。

シェルアーナは最後に、バレンシアの作曲家ビセンテ・アセンシオが1965年に作曲した全5楽章からなる組曲《内なる想い》（第1曲〈心静かに〉、第2曲〈宝物〉、第3曲〈静寂〉、第4曲〈よろこび〉、第5曲〈あこがれ〉）を演奏した。

アセンシオは、エンリク・モレーラとホアキン・トゥリーナに師事したが、彼自身の作風には、マヌエル・デ・ファリャからの影響が伺われる。アセンシオはバレエ作品も書いているが、最もよく知られているのはギターのための作品である。シェルアーナが演奏したこの組曲は、ハープのような音色と美しい響きを聴かせてくれた。

### ●ポーランドのギタリスト、マルシン・ディラのコンサート

今年37歳のギタリスト、マルシン・ディラは、ポーランドのホジュフ出身で、カトヴィツェ音楽院においてアディ・ワンダ・パラツに師事したが、その後、スイスのバーゼル音楽院でオスカー・ギリア教授に、ドイツのフライブルクでソーニャ・プルンバウアー教授に、オランダのマーストリヒトではカルロ・マルキオーネ教授に師事した。

彼は、カトヴィツェ音楽アカデミーの教授をしており、国際ギターコンクールでも数多く賞を獲得している。

ディラは、オープニングにアントン・ディアベッリの〈ソナタ・ヘ長調 Op.29-3〉を演奏した。この作品は、第1楽章 Allegro Moderato、第2楽章 Andante sostenuto、第3楽章 Adajo prestoの全3楽章で構成されている。

ディアベッリは、音楽出版業者としてスタートした。彼はフランツ・シューベルトの初期の作品やマウロ・ジュリアーニの晩年のギター作品を出版したことで知られている。

そして、ディアベッリ自身の数多くの作品はギターのために書かれた。作品29番は、1807年12月にウィーンのインプリメリー・チェミック社が出版したディアベッリのギターソロのための3つのソナタのうちの1曲である。

続いて、ディラが演奏したのは、パオロ・ペゴラーロ編曲によるエンリケ・グラナドスの《詩的ワルツ集》で、以下の9曲により構成される作品である。〈序奏 Vivace molt〉、第1番〈Melodico（旋律的に）〉、第2番〈Tempo de vals noble（高貴なワルツのテンポで）〉、第3番〈tempo de vals lent（ゆっくりとしたワルツのテンポで）〉、第4番〈Allegro humoristico（速く、ユーモラスに）〉、第5番〈Allegretto/Elegante（速めに／優美に）〉、第6番〈Quasi ad libitum/Sentimental（ほとんど自由に／感傷的に）〉、第7番〈Vivo（活き活きと）〉、終曲〈コーダ Presto/Andante〉。

ディラは最後にフィンランドの現代音楽作曲家であるマグヌス・リンドベルイが書いた〈マノ・ア・マノ〉と言うタイトルの作品を演奏した。

リンドベルイは、ニューヨーク・フィルハーモニーの客員作曲家を2年間務めた。この作品は、2004年にトゥルク音楽祭（フィンランドの古都）とベルリン音楽祭の委嘱によって、フィンランドのギタリスト、ティモ・コルホーネンのために作曲されたものである。

タイトルの〈マノ・ア・マノ〉とは“手から手へ”という意味で、通常は3人の闘牛士によって行なわれる闘技場内での雄牛との戦いに、2人の闘牛士のみで立ち向かう闘技を指している。“マノ・ア・マノ”という言葉はもともと英語のスラングで“戦う相手から良いところを取ろうとする試み”を意味する。作曲家は戦いをイメージしてこの曲を書いた。

15分間に及ぶこの作品は、ゆっくりした部分と終わりとの間に挟まれた即興カデンツァを伴った“速い－遅い－速い”の組み合わせで構成されている。テクスチャーはラフだが、スタイルはスペイン風で、多様なムードとテンポを表現している作品である。

詳しくは、以下を参照。

http://lazharcherouana.com/
http://youtu.be/B8yU-h8WlAQ
http://www.marcindylla.com/
http://youtu.be/RK1fohj4vKE